

【宋紀五】 起柔兆困敦，盡重光大荒落，凡六年。

■南宋、●北魏 （国会図書館デジタルコレクション・続国訳漢文大成 經子史部 第7巻 7-250p）

太祖文皇帝中之上元嘉十三年（丙子，436年）

■春，正月，癸丑（1日）朔，上疾有^{やまい}，朝會せず。

●甲寅（2日），魏主は宮に還る。

▲〔魏と燕の決裂〕二月，戊子（6日），燕王は遣使して魏に入貢し，侍子を送らんを請い，魏主は許さず，（一度騙されている）將に兵を擧げて之を討たんとし，壬辰（10日），使者十餘輩を遣わして東方の高麗等の諸國に詣りて之を告諭せしむ。（逃亡先への手当）

■〔宋の重鎮・檀道濟の誅殺〕司空、江州刺史、永修公の檀道濟は，前朝に功を立て，威名は甚だ重く，左右の腹心は並びて百戰を経て，諸子は又た才氣有り，朝廷は之を疑いて畏れる。帝は久しく疾みて愈えず，劉湛は司徒の義康を説いて，以て為す、

「宮車は一日晏駕すれば，道濟は復た制す可からず。」

帝の疾篤きに會し，(7-251p)義康は帝に言い，道濟を召して入朝せしむ。其の妻の向氏は道濟に謂つて曰く、

「高世之勲は，古より忌む所なり。今事無くして相い召すは，禍^{わざわい}は其れ至る矣。」

既に至りて，之を留めて累月。帝は稍間え，將に遣り還さんとし，已に渚（江州に帰らんと既に船を秦淮渚に用意）に下り，未だ發せず。會々^{たまたま}帝の疾動き，義康は矯詔して道濟を召し入りて祖道し，因りて之を執る。三月，己未（8日），下詔して稱す、

「道濟は潜かに金貨を散らし，剽猾を招き誘い，朕が疾に寝ねるに因りて，禍心を肆^{ほしいまま}にせんと規る。」收めて廷尉に付し，並せて其の子の給事黃門侍郎の植等十一人は之を誅し，唯だ其の孫の孺を宥す。又た司空參軍の薛彤、高進之を殺す。二人は皆な道濟の腹心にして，勇力有り，時の人は之を關（羽）、張（飛）に比す。

■〔汝の萬里の長城を壊す〕道濟は收め見れ，憤怒し，目の光は炬の如く，幘^{さく}（頭巾）を脱ぎ地に投げて曰く、

「乃ち汝の萬里の長城を壊す！」

魏人は之を聞き，喜んで曰く、

「道濟死して，吳子の輩は復た憚るに足らず！」

■庚申（9日），大赦す。中軍將軍の南譙王の義宣を以て江州刺史と為す。

▲〔魏の燕討伐〕辛未（20日），魏の平東將軍の娥清、安西將軍の古弼は精騎一萬を將して燕を伐ち，平州刺史の拓跋嬰は遼西の諸軍を帥いて之に會す。

仇地●〔氏王の楊難當自立〕氏王の楊難當は自ら大秦王と稱し，改元して建義とし，妻を立てて王后と為し，世子を太子と為し，百官を置いて皆な天子之制の如し，然るに猶ほ宋、魏に貢奉して絶たず。

▲〔燕の和龍城の悲劇と高句麗の介入〕夏，四月，魏の娥清、古弼は燕の白狼城（熱河道凌源県、現・遼寧省朝

陽市(凌源市)を攻め、之に克つ。高麗は其の將の**葛盧**、**孟光**を遣わして衆數萬を將して**陽伊**に隨いて和龍に至り**燕王**を迎えしむ。高麗は臨川(和龍城に東)に屯す。燕の尚書令の**郭生**は民之遷るを憚るに因りて、城門を開いて魏兵を納める。魏人は之を疑い、入らず。**生**は遂に兵を勒して**燕王**を攻め、**王**は高麗兵を引いて東門より入り、**生**と闕下に戦い、**生**は流矢が中たりて死す。**葛盧**、**孟光**は入城し、軍士に命じて弊褐を脱がしめ、燕の武庫の精仗を取りて以て之に給し、城中を大掠す。

▲**五月**、乙卯(5日)、**燕王**(二王28年にて崩壊)は龍城の見戸を帥いて東に徙り、宮殿を焚いて、火は一句して滅せず。婦人をして甲を被り中に居ら令め、**陽伊**等は精兵を勒して外に居り、**葛盧**、**孟光**は騎を帥いて後ろにしんがり殿にし、軌を方ならべて而して進み、前後八十餘里。**古弼**の部將の**高苟子**は騎を帥いて之を追わんと欲し、**弼**は酔い、拔刀して之を止め、故に**燕王**は逃げ去るを得る。**魏主**は之を聞き、怒りて、檻車をもて**弼**及び**娥清**を征(続は徴)して平城に至らしめ、皆な黜しりぞけて門卒と為す。戊午(8日)、**魏主**は散騎常侍の**封攸**を遣わして高麗に使いせしめ、**燕王**を送ら令めんとす。(高句麗は結局応じず)

●丁卯(17日)、**魏主**は河西に如く。

■**六月**、寧朔將軍の**蕭汪之**に詔して兵を將いて**程道養**を討たしむ。(7-252p)軍は鄆口(鄆江の涪水の合する所、四川省嘉陵道蓬溪県、現・遂寧市蓬溪県)に至り、**帛氏奴**は降るを請う。**道養**の兵は敗れ、還りて鄆山に入る。

●**赫連定**之西遷(前卷八年)する也、**楊難當**は遂に上邽に據る。**秋**、**七月**、**魏主**は驃騎大將軍の樂平王の**丕**、尚書令の**劉黎**を遣わして河西、高平の諸軍を督して以て之を討たしめ、先ず平東將軍の**崔贖**を遣わして詔書を繼(続は齎)いで**難當**を諭さしむ。

●魏の散騎侍郎の**游雅**(鄭の公子偃、字は子游、後に氏とす)は來聘す。

■己未(10日)、零陵王の太妃の**褚氏**は卒し、追って謚して晉の**恭思皇后**と曰い、晉の禮を以て葬す。

●**八月**、**魏主**は河西に敗す。

●**魏主**は廣平公の**張黎**を遣わして定州兵一萬二千を發して莎泉(山西省雁門道靈邱県、現・大同市靈丘県)の道を通じる。

仇地●**〔楊難當は仇池に還る〕****九月**、庚戌(2日)、魏の樂平王の**丕**等は略陽に至る。**楊難當**は懼れ、詔を奉じ、上邽の守兵を攝おさめて仇池に還らんと請う。諸將は議して、以て為す、

「其の豪帥を誅せずんば、軍還る之後、必ず相い聚まりて亂を為さん。又た、大衆は遠く出で、掠むる所有らざれば、以て軍實を充たし、將士に賞する無し。」

丕は將に之に従わんとし、中書侍郎の**高允**は**丕**の軍事に參し、諫めて曰く、

「諸將之謀の如きは、是れ其の化に向かう之心を傷つけるなり。大軍は既に還れば、亂を為すは必ず速し。」

丕は乃ち止み、初めて附くを撫慰して、秋毫も犯さず、秦、隴は遂に安んず。**難當**は其の子の**順**を以て雍州刺史と為し、下辨を守らしむ。

▲**〔高句麗は馮弘を保護〕**高麗は**燕王**を魏に送らず、遣使して表を奉じ、稱す、

「當に**馮弘**と俱に王化を奉ずべし。」

魏主は高麗が詔に違うを以て、之を撃つを議し、將に隴右の騎卒を發せんとす。**劉黎**は曰く、

「秦、隴の新民は、且しばらく當に優復すべし、其の饒じょう(余剩)實まを俟って、然る後に之を用いん。」

樂平王の**丕**は曰く、

「和龍は新たに定まり、宜しく廣く農桑を修め以て軍實を豊かにし、然る後進み取れば、則ち高麗は一舉に滅ず可き也。」

魏主は乃ち止む。

■癸丑（5日）、皇子の浚を封じて始興王と為し、駿を武陵王と為す。

●冬，十一月，己酉（1日），魏主は荊陽に如き、野馬を雲中に於いて驅り、野馬の苑を置く。閏月（元嘉歴十二月），壬子（5日），宮に還る。

■初め、高祖は長安に克ち（118 卷晉の安帝義熙 13 年）、古銅を渾儀（渾天儀）を得て、儀狀は舉げると雖も、七曜（日月五星）を綴せず。是の歲、太史令の錢樂之に詔して更に渾儀を鑄しめ、逕（徑）は六尺八分とし、水を以て之を轉じ、昏明の中星（夕方・明け方に中天にある星）は天と相い應ず。

●柔然は魏と和親（前卷八年）を絶ち、魏の邊を犯す。

●吐谷渾の惠王の慕琬は卒す、弟の慕利延は立つ。（7-253p）

太祖文皇帝中之上元嘉十四年（丁丑，437年）

●春，正月（二月），戊子（12日），魏の北平宣王の長孫嵩は卒す。

■辛卯（15日），大赦す。

●二月（元嘉曆三月），乙卯（9日），魏主は幽州に如く。三月（元嘉曆四月），丁丑（2日），魏主は南平王の渾を以て鎮東大將軍、儀同三司と為し、和龍に鎮せしむ。己卯（3日），宮に還る。

■〔北魏と宋の婚儀ならず〕帝は散騎常侍の劉熙伯を遣わして魏に如きて納幣（前卷十年）を議せしめ、會々帝の女は亡して而して止む。

■〔益州の処分決定〕夏，四月（元嘉曆四月閏月），趙廣、張尋、梁顯等は各々衆を帥いて降る。別將の王道恩は程道養を斬り、首を送り、餘黨（前卷九年來）は悉く平らぐ。丁未（2日），輔國將軍の周籍之を以て益州刺史と為す。

●〔法令遵守を詔するも、変らず〕魏主は民官（郡主県令の民に接する官）は多く貪るを以て、夏，五月，己丑（15日），吏民に詔して守令の法の如くならざる者を舉げて告げるを得しむ。是に於いて奸猾は専ら牧宰之失を求め、位に在るものを迫脅し、閭（巷）裡に於いて横にす。而して長吏は鹹（続は咸）な心を降して之を待ち、貪縦なるは故の如し。

●丙申（23日），魏主は雲中に如く。

●秋，七月，戊子（15日），魏の永昌王の健等は山胡の白龍の餘黨を西河に於いて討ち、之を滅ぼす。

●八月，甲辰（1日），魏主は河西に如く。九月，甲申（12日），宮に還る。

●丁酉（25日），魏主は使者を遣わして吐谷渾王の慕利延を拜して鎮西大將軍、儀同三司と為し、改めて西平王に封じる。

●冬，十月，癸卯（1日），魏主は雲中に如く。十一月，壬申（1日），宮に還る。

●〔魏の西域諸国との国交樹立〕魏主は復た散騎侍郎の董琬、高明等を遣わして多く金帛を繼（続は賁）ぎ、西域に使いし、九國を招き撫でしむ。琬等は烏孫に至り、其の王は甚だ喜び、曰く、

「破洛那（フェルガナ）、者舌（漢の康居国、塔什干、タシケント）の二國は皆な臣を稱し貢を魏に致さんと欲し、但だ路の自ら致る無き耳、今使君は宜しく過りて之を撫すべし。」

乃ち導譯を遣わして琬を送りて破洛那に詣らしめ、明けて者舌に詣らしむ。旁國は之を聞き、争いて使者を遣わして琬等に隨いて入貢するは、凡そ十六國。是れより毎歲朝貢して絶えず。

●〔魏と河西王の婚姻〕魏主は其の妹の武威公主を以て河西王の牧犍の妻とし、河西王は宋繇を遣わして

奉表して平城に詣りて謝し、且つ其の母及び**公主**の宜しく稱すべき所を問う。**魏主**は群臣に之を議せ使め、皆な曰く、

「母は子を以て貴しとし（春秋の義）、妻は夫の爵に従う（禮記）。**牧犍**の母は宜しく河西國太后を稱すべく、**公主**は其の國に於いて王后と稱し、京師に於いては則ち**公主**と稱すべし。」

魏主は之に従う。

● 〔尹氏の酒泉から伊吾への逃亡〕 初め、**牧犍**は涼の**武昭王**之女を娶る。（7-254p）**魏**の**公主**の至るに及び、**李氏**と其の母の**尹氏**は與に酒泉に遷居す。之頃らくして、**李氏**は卒し、**尹氏**は之を撫し、哭さず、曰く、

「汝の國は破れて家亡ぶ、今死するは晩し矣。」

牧犍之弟の**無諱**は酒泉に鎮し、**尹氏**に謂って曰く、

「後の諸孫は伊吾（119 卷）に在り、**后**は之に就かんと欲す乎？」

尹氏は未だ其の意を測らず、之を給きて曰く、

「吾の子孫は漂蕩し、異域に身を托して、餘生は幾も無し、當に此に死すべし、復た氈裘（匈奴人の服するもの）之鬼（匈奴に死すの意味）と為らざる也。」

未だ幾もならずして、**潜**に伊吾に奔る。**無諱**は騎を遣わして追わしめて之に及び、**尹氏**は追騎に謂って曰く、

「沮渠酒泉は吾の北に歸るを許す、何為れぞ復た追うや！汝は吾の首を取りて以て往け、吾は復た還らず矣。」

追騎は敢えて逼らず、引いて還る。**尹氏**は伊吾に於いて卒す。

北涼●■ 〔牧犍は魏と宋に等距離外交〕 **牧犍**は將軍の**沮渠旁周**を遣わして魏に入貢せしめ、**魏主**は侍中の**古弼**、尚書の**李順**を遣わして其の侍臣に衣服を賜い、並びて世子の**封壇**を征して入りて侍せしむ。是の歲、**牧犍**は**封壇**を遣わして魏に如かしめ、亦た遣使して建康に詣らしめ、雜書及び敦煌の**趙匪文**の撰ずる所の《甲寅元歷》を獻じ、並びに雜書數十種を求め、**帝**は皆な之を與える。

● 〔魏は西征せず〕 **李順**は河西より還り、**魏主**は之に問って曰く、

「卿は往年涼州を取る之策を言えり、**朕**は東方に事有るを以て、未だ遑あらざる也。今和龍は己に平らぎ、吾は即ち此の年を以て西征せんと欲す、可なる乎？」

對えて曰く、

「臣 疇（仲間）昔言う所（前卷十年）は、今を以て之を觀るに、**私**に謂うに遑まらずと。然れども國家は戎車は屢々動き、土馬は疲勞し、西征之義は、它年を俟つを請う。」

魏主は乃ち止む。

太祖文皇帝中之上元嘉十五年（戊寅，438年）

■ **春，二月**，丁未（7日），吐谷渾王の**慕利延**を以て都督西秦、河、沙三州諸軍事、鎮西大將軍、西秦、河二州刺史、隴西王と為す。

● **三月**，癸未（13日），**魏主**は詔して沙門の年五十已下の者を罷む。（壯健なる者を還俗させ征役を課す）

▲ **高句麗**■ 〔燕王の馮弘の高句麗逃亡と誅殺〕 初め、燕王の弘は遼東に至り、高麗王の**璉**は遣使して之を勞わって曰く、

「龍城王の馮君は、爰に適々^{ここ たまたま}野次し、士馬は勞する乎？」

弘は怒り慚（慚）じて、制と稱して之を讓む。高麗は之を平郭（奉天省遼瀋道蓋平県、現・遼寧省營口市蓋州市）に處き、尋いで北豐（平郭近辺）に従す。弘は素より高麗を侮り、政刑賞罰は、猶ほ其の國の如し。高麗は乃ち其の侍人を奪い、其の太子の王仁を取って質と為す。弘は高麗を怨み、遣使して（宋に）來たりて上表して迎えんことを求め、上は使者の王白駒等を遣わして之を迎えしめ、並びに高麗に資遣せ令む。高麗王は弘をして南に來たら使むるを欲せず、將の孫漱、高仇等を遣わして北豐に於いて弘、並びに其の子孫の十餘人を殺し、弘に謚して昭成皇帝と曰う。白駒等は所領七千餘人を帥いて漱、仇を掩討し、仇を殺し、漱を生擒りにす。高麗王は白駒等が專殺するを以て、遣使して執りて之を送る。上は遠國なるを以て、其の意に違ふを欲せず、(7-255p) 白駒等を獄に下す。已にして而して之を原す。

■夏，四月，故黃門侍郎の殷淳女を納れて太子の劬の妃と為す。

●五月，戊寅（9日），魏は大赦す。

●[魏の柔然討伐の失敗] 丙申（27日），魏主は五原に如く。秋，七月，五原より北に柔然を伐つ。樂平王の丕に命じて十五將を督して東道に出でしめ、永昌王の健は十五將を督して西道に出でしめ、魏主は自ら中道に出る。浚稽山に至り、復た中道を分けて二と為す。陳留王の崇は大澤より涿邪山に向かう、魏主は浚稽に従いて北の天山（漠北にあり）に向かい、西に白阜（雪山）に登り、柔然を見ず而して還る。時に漠北は大旱にして、水草無く、人馬は多く死す。冬，十一月，丁卯（1日）朔，日に之れ食有り。

●十二月，丁巳（22日），魏主は平城に至る。

■[雷次宗と文芸復興] 豫章の雷次宗は學を好み、廬山（尋陽にあり、江西省潯陽道星子県の西北、九江市廬山市）に隱居す。嘗て征して散騎侍郎と為す、就かず。是の歲、處士を以て征せられて建康に至り、為に館を雞籠山に於いて開き、徒を聚めて教授せ使むる。帝は雅より藝文を好み、丹陽尹の廬江の何尚之をして玄學（老莊のが苦節の學舎）を立て使め、太子の率更令（宮殿の門戸・賞罰を掌る）の何承天をして史學を立てしめ、司徒參軍の謝元をして文學を立てしめ、次宗の儒學を並せて四學と為す。元は、靈運之從祖弟也。帝は數々次宗の學館に（行）幸し、次宗をして巾褱（巾幘単衣）を以て侍講せ令め、資給は甚だ厚し。又た給事中に除すも、就かず。之久しくして、廬山に還る。

■[天下に二道無く、安んぞ四學有るや] 臣光は曰く、《易（大畜の卦の象辭）》は曰う、

「君子は多く前言の往行を識り、以て其の徳を蓄う。」

孔子は曰く、

「辭は達すれば而して已む矣。」（論語衛靈公篇にあり）

然らば則ち史者儒之一端なり、文者儒之餘事なり。老、莊の虛無に至りては、固より教えの為す所以に非らざる也。夫れ學者の道を求める所以なり。天下に二道は無く、安んぞ四學有る哉！

■[皇帝の善政、元嘉の治] 帝の性は仁厚にして恭儉、政を為すに勤めて、法を守りて而して峻ならず、物を容れて而して弛まず。百官は皆な其の職に久しく、守宰は六期を以て斷と為し、吏は苟しくも免れず、民は繁かる所有り。三十年間、四境之内は、晏安にして事無く、戸口は蕃息す。租を出だし徭を供するに、歲賦に止まり（常賦以外に搾取せず）、晨に出でて暮に歸り、自ら事とする而して已む（自分の事だけですむ）。閭閻（巷）之内に、講誦は相い聞く。士は操尚に敦く、郷は輕薄を恥じる。江左の風俗は、斯に於いて美と為す。後之政治を言う者は、皆な元嘉と稱す焉。

太祖文皇帝中之上元嘉十六年（己卯，439年）

■**春，正月**，庚寅（25日），司徒の**義康**は大將軍に位を進め、司徒（丞相）を領し、南兖州刺史、（7-256p）江夏王の**義恭**は司空に位を進められる。

●**魏主**は定州に如く。

■**〔義宣の荊州刺史就任中止、義季と老父〕**初め、**高祖**は遣詔して、諸子をして第を次いで荊州に居ら令む。臨川王の**義慶**は荊州に在ること八年、之が為に代を選ばんと欲し、其の次に應に南譙王の**義宣**に在るべし。**帝**は**義宣**の人才の凡鄙なるを以て、置きて用いず。**二月**，己亥（5日），衡陽王の**義季**を以て都督荊、湘等八州諸軍事、荊州刺史と為す。**義季**は嘗て春の月出でて畋し、老父の苦（菅茅の笠）を被り而して耕す有り、左右は之を斥け、老父は曰く、

「游畋に盤しむは、古人の戒むる所なり。今陽和は氣を布く、一日耕さざれば、民は其の時を失う、奈何して禽に従う之樂しみを以て而して老農を驅斥する也！」

義季は馬を止めて曰く、

「賢者也！」

命じて之に食を賜う、辭して曰く、

「大王は農時に奪わずんば、則ち境内之民は皆な大王之食に飽きん、老夫は何んぞ敢えて獨り大王之賜を受ける乎！」

義季は其の名を問ひ、告げずして而して退く。

●**三月**，魏の雍州刺史の**葛那**（賀葛氏を葛に改める）は上洛（陝西省關中道商縣、現・商洛市商州縣）を寇し、上洛太守の**鐔長生**は郡を棄てて走る。

●辛未（7日），**魏主**は宮に還る。

仇地●**〔楊保宗を武都王〕****楊保宗**と兄の**保顯**は童亭（前卷12年にある）より魏に奔る。庚寅（26日），**魏主**は**保宗**を以て都督隴西諸軍事、征西大將軍、開府儀同三司、秦州牧、武都王と為し、上邽に鎮せしめ、妻すに公主を以てす。**保顯**を鎮西將軍、晉壽公と為す。

【北魏は北涼を討伐へ】

北涼●**〔河西王の牧犍の叛意〕**河西王の**牧犍**は其の嫂の**李氏**に通じ、兄弟三人は傳いに之を嬖（寵愛）す。**李氏**は**牧犍**之姉と共に魏の公主を毒し、**魏主**は解毒醫を遣わして傳に乗りて之を救わしめ、愈ゆるを得る。●**魏主**は**李氏**を征し、**牧犍**は遣らず、厚く資給し、酒泉に居ら使む。

北涼●魏は使者を遣わして西域に詣らしむる毎に、常に**牧犍**に詔して導を發して護送して流沙を出でしむ。使者は西域より還り、武威に至り、**牧犍**の左右の魏の使者に告げる有りて曰く、

「我が君は蠕蠕の可汗の妄言を承けて云う、『去歲、魏の天子は自ら來りて我を伐ち、士馬は疫死し、大敗して而して還る。我は其の長弟の樂平王の丕を擒とす。』我が君は大きく喜び、國に於いて宣言す。又た可汗が遣使して西域諸國に告げるを聞く、稱す、『魏は已に削られて弱く、今天下は唯だ我のみ強きと為し、若し更に魏使有れば、復た供奉する勿かれ。』西域諸國は頗る貳心（兩屬）有り。」

使いは還り、具に狀を以て聞く。**魏主**は尚書の**賀多羅**を遣わして涼州に使いして虛實を觀しむ、**多羅**は還り、亦た言う、

「**牧犍**は外は臣の禮を修めると雖も、内實は乖悖（かいぼつ（乖離乱れる）す。」

● **〔牧犍討伐の是非の議論〕**魏主は之を討たんと欲し、以て**崔浩**に問う。對えて曰く、

「**牧犍**の逆心は已に露わり、誅せざる可からず。官軍は往年北伐し、(7-257p)克たずと雖も獲り、實は損する所無し。戰馬は三十萬匹あり、計るに道に在りて死傷するは八千に滿たず、常歲に羸（るい（弱る）死は亦た萬匹に減ぜず。而るに遠方に虚に乗り、遽かに謂うに衰耗は復た振う能わず。今其の不意に出でて、大軍猝かに至れば、彼は必ず駭擾し、為す所を知らず、之を擒にするは必なり矣。」

魏主は曰く、

「善なり！吾が意も亦た以て然りと為す。」

是に於いて公卿を大集して西堂（大極殿に東西堂あり）に於いて議す。

弘農王の**奚斤**等三十餘人は皆な曰く、

「**牧犍**は、西垂の下國にして、心は純臣ならずと雖も、然も父の位を繼ぎて以來、職貢は乏しからず。朝廷は待つに籓臣を以てし、妻すに公主を以てす。今其の罪惡は未だ彰かにせず、宜しく恕宥を加えるべし。國家は新たに蠕蠕を征し、士馬は疲弊し、未だ大舉する可からず。且つ聞く其の土地の鹵瘠にして、水草を得るに難く、大軍は既に至れば、彼は必ず城に嬰りて固守す。之を攻めて拔かざれば、野は掠する所無く、此は危き道也。」

● **〔西域に水草有るや無しや〕**初め、**崔浩**は尚書の**李順**を惡み、**順**は涼州に使すこと凡そ十二返、**魏主**は以て能ありと為す。涼の**武宣王**は數々**順**と游宴し、其の群下に對し時に驕慢之語りを為す。**順**が之を洩（（続は泄））らさんを恐れ、隨いて金寶を以て**順**の懷に納れ、**順**も亦た之が為に隱す。**浩**は之を知り、密かに以て**魏主**に白し、**魏主**は未だ之を信じず。涼州を伐つを議するに及び、**順**と尚書の**古弼**と皆な曰く、

「**溫圉**（北史に溫圉、甘肅省蘭山道阜蘭県、現・蘭州市阜蘭県）水より以西の姑臧に至るまでは、地は皆な枯石にして、絶えて水草無し。彼（涼）の人は言う、姑臧城南の天梯山の上には、冬は積雪有り、深さは丈餘に至り、春夏は消釋し、下流は川と成り、居民は引いて以て溉灌す。彼は軍至るを聞けば、此の渠口を決し、水は必ず乏しく絶たん。城を環りて百里之内は、地は草生えず、人馬は飢え渴し、以て久しく留まるは難し。**斤**等之議は是也。」

魏主は乃ち**浩**に命じて**斤**等と相い詰難せしむ。衆は復た它言無く、但だ云う

「彼に水草は無し」。

浩は曰く、

「《漢書・地理志》は稱す『涼州之畜は天下の饒と為る』、若し水草無ければ、畜は何を以てか蕃からんや？又た、漢人は終に水草之無き地に城郭を築き、郡縣を建てざらん也。且つ雪之消釋するは、僅かに能く塵を斂めるのみ、何ぞ渠を通じて溉灌するを得ん乎！此の言は大いに欺誣と為す矣。」

李順は曰く、

「耳に聞くは目に見るに如かず、吾は嘗て目で見たり、何の共に辯じる可けんや」

浩は曰く、

「汝は人の金錢を受け、之が為に遊説せんと欲し、我の目は見えざるを謂い便ち欺む可き邪！」
帝は隠れて之を聽聞し、乃ち出でて**斤**等を見、辭色は嚴厲なり、群臣は敢えて復た言わず、唯唯而して已む。

● 群臣は既に出で、振威將軍の代人の**伊戾**は**帝**に言つて曰く、

「涼州に若し果たして水草無ければ、彼は何を以て國を為すや？衆の議は皆な用いる可からず、宜しく

浩の言に従う可し。」

帝は之を善しとす。

●**〔魏主は牧犍討伐軍を発す〕**夏, 五月, 丁丑（14日）, 魏主は兵を西郊に治す。六月, 甲辰（12日）, 平城を發す。侍中の宜都王の穆壽をして太子の晃なすを輔けて監國し使め, 留台の事を決せ使め, 内外焉これに聽く。又大將軍の長樂王の稽敬（北史には嵇敬、これが正しい。魏書官氏志に紇奚氏を改めて嵇氏とす）、輔國大將軍の建寧の王崇をして二萬人を將して漠南に屯し以て柔然に備え使む。公卿に命じて書を為つくらしめて以て河西王の牧犍を讓め, 其の十二罪を數えて, 且つ曰く、

「若し親ら群臣を帥いて贄を委して（古に贄を執て以て見えて拝す。稽首して首を地に委ね、立つときは取りて進む）て遠く迎え, 馬首を謁拜するは, 上策也。六軍は既に臨み, 面縛して櫬しん（棺桶）を輿になうは, 其の次也。若し窮城を守迷し, 時に悛悟（改悛）せずんば, 身は死して族は滅び, 世の大戮と為らん。宜しく厥そ（ぬかずく）の中を思い, 自ら多福を求めるべし！」

■己酉（17日）, 改めて隴西王の吐谷渾の慕利延を封じて河南王と為す。

●**北涼**魏主は雲中より河を濟り, 秋, 七月, 己巳（7日）, 上郡の屬國城（漢は辺地に属国を置く）に至る。壬午（20日）, 輜重を留め, 諸軍を部分し, 撫軍大將軍の永昌王の健、尚書令の劉瓘と常山王の素をして前鋒と為し, 兩道並びて進ま使む。驃騎大將軍の樂平王の丕、太宰の陽平王の杜超をして後繼と為らしむ。平西將軍の源賀を以て郷導と為す。

●**北涼**魏主は賀（僊檀の子）に涼州を取るの方略を以て問い, 對えて曰く、

「姑臧城は旁に四部の鮮卑有り, 皆な臣の祖父の舊民なり, 臣は願わくは軍前に處り, 國の威信を宣のべ, 示して禍福を以てすれば, 必ず相い帥いて命に歸せん。外援は既に服し, 然る後に其の孤城を取れば, 掌を反す如き耳。」

魏主は曰く、

「善きかな！」

●八月, 甲午（2日）, 永昌王の健は河西の畜産二十餘萬を獲る。

●**北涼**〔魏軍の姑臧包圍〕河西王の牧犍は魏の師有るを聞き, 驚いて曰く、

「何なんす為れぞ乃ち爾しかるや！」

左丞の姚定國の計を用いて, 肯えて出で迎えず, 救いを柔然に求める。其の弟の征南大將軍の董來を遣わして兵萬餘人を將して出でて城南に於いて戦わしむも, 風を望んで奔潰す。劉瓘は卜者の言を用い, 「日辰の利あらず」

と以て為し, 兵を斂おさめて追わず, 董來は遂に入城するを得る。魏主は是に由りて之を怒る。

●**北涼**〔姑臧に水草は豐饒なり〕丙申（4日）, 魏主は姑臧に至り, 遣使して牧犍を諭らしめて出で降ら令む。牧犍は柔然の魏邊に入りて寇を為さんと欲すを聞き, 魏主が東に還るを冀（請い願う）幸し, 遂に城に嬰りて固守す。其の兄の子の祖は城を逾えて出で降り, 魏主は具に其の情を知り, 乃ち軍を分けて之を圍む。源賀は兵を引いて諸部を招き慰め三萬餘落を下し, 故に魏主は専ら姑臧を攻め, 復た外慮無きを得たり。

魏主は姑臧の城外を見るに水草は豐饒なり, 是に由りて李順を恨み, 崔浩に謂って曰く、

「卿之昔言は, 今果たして驗あり矣。」

對えて曰く、

「臣之言は敢えて實ならざるにあらず、^{おおむ}類ね皆な此くの如し。」

●魏主之將に涼州を伐たんとする也、太子の晃は亦た以て疑いと為す。是に至り、魏主は太子に賜って詔して曰く、

「姑臧の城東、西門の外、湧泉ありて城北に合す、其の大なるは河の如し。自餘の溝渠は漠中に流入し、其の間は乃ち燥地無し。故に此く敕有り、以て汝の疑いを釋かん。」

■庚子（8日）、皇子の鑠を立てて南平王と為す。

●【牧犍の降伏】九月，丙戌（25日）、河西王の牧犍の兄の子の萬年は所領を帥いて魏に降る。姑臧城は潰え、（7-259p）牧犍は其の文武五千人を帥いて面縛して降を請い、魏主は其の縛を釋きて而して之を禮す。其の城内の戸口二十餘萬を収め、倉庫の珍寶は勝^あげて計^{かぞ}える可からず。張掖王の禿髮保周、龍騎將軍の穆羆、安遠將軍の源賀をして分けて諸郡を徇え使め、雜胡の降る者は又た數十萬。

●【戦後の涼州大混乱の收拾】初め、牧犍は其の弟の無諱を以て沙州刺史と為し、建康以西諸軍事を都督し、酒泉太守を領せしめ、宜得を秦州刺史と為し、丹嶺（姑臧の西、甘肅省甘涼道山丹県、現・張掖市山丹県）以西諸軍事を都督し、張掖太守を領せしめ、安周を樂都太守と為し、從弟の唐兒を敦煌太守と為す。姑臧の破らるるに及び、魏主は鎮南將軍の代人の奚眷を遣わして張掖を撃たしめ、鎮北將軍の封沓をして樂都を撃たしむ。宜得は倉庫を焼き、西に酒泉に奔る。安周は南に吐谷渾に奔り、封沓は數千戸を掠^{かす}めて而して還る。奚眷は酒泉に進攻し、無諱、宜得は遺民を収めて晉昌に奔り（続は犍）、遂に敦煌の唐兒に就く。魏主は弋陽公の元絜をして酒泉を守らしめ、及び武威、張掖には皆將を置いて之を守らしむ。

●【魏主は伊戾を奇となす】魏主は姑臧に酒を置き、群臣に謂って曰く、

「崔公の智略は餘有るは、吾は復た以て奇と為さず。伊戾は弓馬之士、而るに見る所は乃ち崔公と同じく、深く以て奇となす可き也！」

伊戾は善く射ち、能く牛を曳いて卻（続は却）行し、走りて奔馬に及び、而して性は忠謹、故に魏主は特に之を愛す。

●【穆壽はト筮を信じて柔然に備えず】魏主之西伐する也、穆壽は送って河（黄河）上に至り、魏主は之に敕して曰く、

「吳提（柔然の敕連可汗）と牧犍は相い結ぶこと素より深く、朕が牧犍を討つを聞けば、吳提は必ず塞を犯さん、朕は故に壯兵肥馬を留めて、卿をして太子を輔佐せ使む。田を収めて既に畢^{おひ}われれば、即ち兵を發して漠南に詣り、分けて要害に伏して以て虜の至るを待つべし。引いて深く入ら使めて、然る後に之を撃てば、克たざるは無し矣。涼州の路は遠く、朕は救うを得ず、卿は朕の言に違^{ちが}う勿かれ！」

壽は頓首して命を受ける。壽は雅より中書博士の公孫質を信じ、以て謀主と為す。壽、質は皆なト筮を信じ、以て柔然の必ず來たらずと為し、之が備えを為さず。質は、軌之弟也。

●【柔然の平城急襲と撃退】柔然の敕連可汗（郁久間吳提）は魏主の姑臧に向かうを聞き、虚に乗りて入寇し、其の兄の乞列歸を留め^{けいけい}嵇敬、建寧王の崇と北鎮（魏が高車を破って置いた六鎮、平城の北、代都の北の懷朔鎮ともいう、懷朔鎮は蒙古の烏喇特・茂明安二旗の地）に於いて相い拒ばしめ、自ら精騎を帥いて深く入り、善無（山西省雁門道右玉県の南、現・朔州市右玉県）の七介山に至り、平城は大いに駭き、民は争いて中城に走る。穆壽は為す所を知らず、西郭門を塞がんと欲し、太子に避けて南山を保つを請い、寶太后（保太后）は聽かず而して止める。司空

の長孫道生、征北大將軍の張黎を遣わして之を吐頰山に拒ましむ。會々嵇敬、建寧王の崇は撃ちて乞列歸を陰山之北に於いて破り、之を擒にし、其の伯父の他吾無鹿胡及び將帥五百人を並せ、斬首は萬餘級なり。敕連は之を聞き、遁げ去る。追いて漠南に至り而して還る。

●「魏主は北涼を治めて帰還へ」 冬，十月，辛酉（30日），魏主は東に還り，樂平王の丕及び征西將軍の賀多羅を留めて涼州に鎮せしめ，（7-260p）沮渠牧犍の宗族及び吏民三萬戸を平城に徙す。

（元嘉曆十一月）癸亥（3日），禿髮保周は諸部の鮮卑を帥いて張掖に據りて魏に叛す。

■十二月（元嘉曆十二月閏月），乙亥（16日），太子の劼は元服を加え，大赦す。劼は鬢眉は美しく，讀書を好み，弓馬に便じ，喜びて賓客を延く。意之欲する所，上は必ず之に従い，東宮は兵を置くこと羽林（宿衛の官、その疾き事羽の如く多き事林の如し）と等し。

●「沮渠牧犍の優遇」 壬午（23日），魏主は平城に至り，柔然の入寇すれども，大きな失亡は無きを以て，故に穆壽等は誅せられざるを得る。魏主は猶ほ妹婿を以て沮渠牧犍を侍ち，征西大將軍、河西王は故の如し。牧犍の母は卒するや，太妃の禮を以て葬す。武宣王の為に塚を守る三十家を置く。

●「涼州は人材豊富」 涼州は張氏より以來，號して多士（永嘉の乱以來多く河西に行き、張氏礼して用い、子々孫々承ける）と為す。沮渠牧犍は尤も文學を喜び，敦煌の闕駟を以て姑臧太守と為し，張湛を兵部尚書と為し，劉曷、索敞、陰興を國師助教と為し，金城の宋欽を世子の洗馬と為し，趙柔を金部郎（財帛の委輸を掌る）と為し，廣平の程駿、駿の從弟の弘を世子の侍講と為す。魏主は涼州に克つや，皆な禮して而して之を用い，闕駟、劉曷を以て樂平王の丕の從事中郎と為す。安定の胡叟，少くして俊才有り，往きて牧犍に従い，牧犍は甚だ之を重しとせず，叟は程弘に謂って曰く、

「貴主は僻陋之國に居り而して名に淫し禮を僭し，小を以て大に事え而も心は純壹ならず，外には仁義を慕い而して實は道德無く，其の亡びんは足を翹ちて待つ可き也。吾は將に木を擇ばん（左傳、衛の孔文子は大叔父の疾を攻めんとし、仲尼曰く、用兵の事は未だ學ばず。退きて駕して行く、曰く、鳥は則ち木を擇ぶ、木豈能く鳥を擇ぶばんと）とし，先ず魏に於いて集まらん。子と暫く違えども，久闊に非らざる也。」

遂に魏に適く。歲餘にして而して牧犍は敗れる。魏主は叟を以て先識と為し，虎威將軍と拜し，爵して始復（續で姑復の誤りか、姑復県あり）男を賜わる。河内の常爽は，世々は涼州に寓し，禮命を受けず，魏主は以て宣威將軍と為す。河西の右相の宋綏は魏主に従つて平城に至り而して卒す。

●「魏の儒学振興」 魏主は索敞を以て中書博士と為す。時に魏朝は方に武功を尚び，貴遊の子弟（王公の子弟の官司無き者）は講學を以て意と為さず（續は不、否定形）。敞は博士たること十餘年為り，誘導に勤めて，肅として而して禮有り，貴遊は皆な是を嚴憚（畏懼、害怕）し，成立する所多く，前後は顯達（立身出世、榮達）して尚書、牧守に至る者は數十人。常爽は溫水（水經註に桑乾城の西十里に溫湯あり、山西省雁門道山陰県、現・朔州市山陰県）之右に館を置き，教授するは七百餘人。爽は賞罰之科を立て，弟子は之に事えること嚴君の如し。是に由りて魏之儒風は始めて振う。高允は毎に爽の訓厲すること方に有りと稱し，曰く、

「文翁（漢景帝の末に蜀郡の守りとなり、仁愛で教化を好み、郡県の人材を選んで京に送る。成都に学館を置く。蜀の儒学振興の元）は柔をもって勝ち，先生は剛をもって克つ，教えを立てることは殊なると雖も，人を成すは一也。」

●陳留の江強は，涼州に寓居し，經、史、諸子千餘卷及び書法を獻じ，（7-261p）亦た中書博士を拜す。魏主は崔浩に命じて秘書事を監じ，史職を綜理せしむ。中書侍郎の高允、散騎侍郎の張偉を以て著作を參典せしむ。浩は啓して稱す、

「陰仲達、段承根は涼土の美才なり、國史を修すに同じくすを請う。」

皆な著作郎に除す。仲達は、武威の人なり。承根は、暉（段暉は乞伏熾磐・暮末に仕える）之子也。

●[魏の歴史編纂、崔浩と高允の議論] 浩は諸々歴家を集め、漢元（漢初）以來の日月の薄食、五星の行度を考校し、並せて前史之失を譏り、別に《魏歴》を為り、以て高允に示す。允は曰く、

「漢の元年十月、五星は東井に聚まるは、此れ乃ち歴術之淺事なり。今漢史を譏りて而も此の謬を覺らず、後人之今を譏るを恐れて、猶ほ今之^{いにしえ}古を譏るとき也。」

浩は曰く、

「謬まる所は雲何？」

允は曰く、

「《星傳》を案ずるに、『太白は、辰星にして常に日に附きて而して行く。』十月、日は尾、箕（猛冬の日に尾有り、尾箕とは一月に渡りて有るをいう）在り、昏に^{くれ}申の南に没して、而して東井は^{まさ}方に寅の北に出で、二星は何をか日に背きて而して行くを得るや？是れ史官は其の事を神にせんと欲し、復た之を理に於いて推さざる也。」

浩は曰く、

「天文は變を為さんと欲する者^は、何ぞ不可なる所あらん邪？」

允は曰く、

「此くは空言を以て争う可からず、宜しく更に之を^{つまびらかに}審すべし。」

坐者は鹹な允之言を怪しみ、唯だ東宮（太子の宮）の少傅の游雅は曰く、

「高君は歴（^{続は曆}）數に^{くわ}精し、當に虚ならざる也。」

後に歲餘にして、浩は允に謂って曰く、

「先ず論ずる所の者は、本は心に經せざり（意を留めざるなり）。乃ち更に考究するに、果たして君の言の如し。五星は乃ち前三月を以て東井に聚まる、十月に非らざる也。」

衆は乃ち歎服す。允は歴（^{続は曆}）に明らかと雖も、初め推歩し及び人の為に論説をせず、唯だ游雅は之を知る。雅は數々災異を以て允に問い、允は曰く、

「陰陽災異は、之を知るは甚だ難し。既に已に之を知り、復た漏洩するを恐れ、知らざるに如かざる也。天下の妙理は至って多く、何に遽（^{続は以}）りて此れを問うや！」

雅は乃ち止む。魏主は允に問う、

「政を為すに何をか先にせんや？」

時に魏は多く良田を封じ禁ず、允は曰く、

「臣は少きときは賤しく、唯だ農事を知るのみ。若し國家が田を廣げ穀を積み、公私に備え有れば、則ち饑饉は憂うるに足らず矣。」

帝は乃ち命じて悉く田禁を除いて以て百姓に賦（分け与える）す。

●[魏主は吐谷渾王の慕利延を撫諭す] 吐谷渾王の慕利延は魏の涼州に克つを聞き、大いに懼れ、衆を帥いて西に遁れ、沙漠を逾える。魏主は其の兄の慕瑰が赫連定を擒にするの之功有るを以て、遣使して之を撫諭し、慕利延は乃ち故地に還る。

●[仇地] [氏王の楊難當の上邽侵入] 氏王の楊難當は兵數萬を將して魏の上邽を寇し、秦州の人は多く之に應ず。東平の呂羅漢は鎮將の拓跋意頭に説いて曰く、

「難當の衆は甚（^{続は盛}）し、今出でて戦わず、之に示すに弱を以てせば、衆情は離沮、守る可からざる也。」

意頭は羅漢を遣わして精騎千餘を將して出でて難當の陳を沖(続は衝)かしめ、向かう所披靡し、其の左右の騎八人を殺し、難當は大いに驚く。會々魏主は璽書を以て難當を責讓し、(7-262p) 難當は引いて仇池に還る。

■南豐太妃(元嘉九年帝は江夏王義恭の子朗を南豐王とし、滎陽王の祀を奉ぜしめて、后を南豐太妃とす)の司馬氏は卒す、故の滎陽王之后也。

■趙廣、張尋等は復た謀反し、伏して誅す。(十四年に降り、建康に至り、また反す)

太祖文皇帝中之上元嘉十七年(庚辰、440年)

●[沮渠無諱の胎動]春、正月、己酉(20日)、沮渠無諱は魏の酒泉を寇し、元絜は之を輕んじ、城を出て與に語る。壬子(23日)、無諱は絜を執りて以て酒泉を圍む。

■二月、魏の假通直常侍の邢穎は來聘す。(散騎常侍の通直する、臨時の官)

●三月、沮渠無諱は酒泉を抜く。

●夏、四月、戊午(1日)朔、日に食之れ有り。庚辰(23日)、沮渠無諱は魏の張掖を寇し、禿髮保周は刪丹に屯す。丙戌(29日)、魏主は撫軍大將軍の永昌王の健を遣わして諸將を督して之を討たしむ。

【劉義康と劉湛の専權と失脚・誅殺】

■[義康は朝權を專總] 司徒の義康は専ら朝權を總べる。上の羸疾(疲れ病)は積年、心勞(ストレス)すれば輒ち發し、屢々危殆に至る。義康は心を盡して營奉し、藥食(続は石)は口親ら嘗める所に非らざれば進めず、或いは連夕寐ねず、内外の衆事は皆な專決して施行す。性は吏職を好み、文案を糾剔し、精を盡くさざる莫し。上は是に由りて多く委ねるに事を以て、凡そ陳奏する所、入りて可からざる無し。方伯以下、並びに義康をして選用せ令め、生殺の大事は、或いは錄命(義康は尚書事を錄すので錄命)を以て之を斷ず。勢いは遠近を傾け、朝野は輻湊し、且毎に府門は常に車數百乘有り、義康は身を傾けて引接し、未だ嘗て懈倦(飽きてサボる)せず。復た能く強記(記憶)し、耳目の經る所、終に身は忘れず。好みて稠人(衆人)廣席に於いて、憶する所を標題し以て聰明を示す。士之幹練(才幹練達)なる者は、多く意遇(知遇)せ被る。嘗て劉湛に謂って曰く、

「王敬弘、王球之屬(皆門望で八座に位し、文按を以て心に関せず)は、竟に何の堪える所かあるや! 坐して富貴を取り、復た那して解す可きか!」

然るに素より學術無く、大體を識らず、朝士の才用有る者は皆な引いて己の府に入れ、府僚は施(功勞)無く及び旨に忤(逆)う者は乃ち斥けて台官と為す。自ら謂うに、

「兄弟は至親なり」

復た君臣の形跡(続は迹)を存せず、心に率いて而して行ふ、曾て猜防(疑い深く用心)無し。私に僅を置くこと六千餘人、以て台(晉宋以来天朝を天臺という)に言わず、四方の獻饋(献上贈物)は、皆な上品を以て義康に薦め、而して次なる者を以て供御す。上は嘗て冬の月に甘(蜜柑)を啖(続は噉)い、其の形味の並びて劣るを歎じて、義康は曰く、

「今年の甘は殊に佳き者有り。」

人を遣わして東府に還りて甘を取らしむ、供御の者よりも大なること三寸。

■ 〔劉湛と殷景仁の対立〕 領軍の劉湛は僕射の殷景仁と隙（前卷十二年）有り、湛は義康之重きに倚りて以て之を傾けんと欲す。義康の權勢は已に盛んにして、湛は愈々之を推崇し、復た人臣之禮無く、(7-263p) 上は浸く（水が浸みる様に）平かなる能わず。湛は初め入朝するや、上の恩禮は甚だ厚し。湛は善く治める道を論じ、前代の故事を諳じ、致を敘べ理を銓（選、順序立てて述べる）し、聴く者は疲れるを忘れる。雲龍門に入る毎に、御者は即ち駕を解き、左右及び羽儀は意に隨いて分散し、夕ならざれば出でず、此くを以て常と為る。晩節に及びて義康を驅煽（おだてる、馬の鞭を早くし気炎を煽る）するに、上の意は内に離れると雖も而して接遇は改めず、嘗て親する所に謂って曰く、

「劉班（劉湛の小子は班虎）は方に西より還り、吾は與に語り、常に日の早晚を視て、其の將に去らんとするを慮る。比入るや、吾は亦た日の早晚を視、其の去らざるを苦とす。」

殷景仁は密かに上に言いて曰く、

「相王の權重きは、社稷の計に非らず、宜しく少しく裁抑を加えるべし。」

上は陰かに之を然りとする。

■ 〔義康の側近〕 司徒の左長史の劉斌は、湛之宗（一族）也。大將軍の從事中郎の王履は、謚（宋創立時の重臣）之孫也。及び主簿の劉敬文、祭酒魯郡の孔胤秀は、皆な傾詔（おもねり）を以て義康に寵有り。上の疾多きを見、皆な謂う、

「宮車が一日晏駕すれば、宜しく長君を立てる可し。」

上は嘗て疾篤く、義康をして顧命（遺詔）の詔を具せしむ。義康は省に還り、流涕して以て湛及び景仁に告げる。湛は曰く、

「天下は艱難にしては、詎ぞ是れ幼主の御する所ならんや！」

義康、景仁は並びて答えず。而して胤秀等は輒ち尚書の儀曹（南史に儀曹、曹魏の二十三部の一）に就いて晉の鹹（続は咸）康の末に康帝（97 卷にあり）を立てるの舊事（皇帝の子が幼く、弟が立つ）を索め、義康は知らざる也。上の疾の瘳えるに及び、微かに之を聞く。而して斌等は密かに謀り、大業をして終に義康に歸さしめんと欲し、遂に朋黨を邀しく結び、禁省を伺察し、己と同じせざる者有れば、必ず百方之を構陷し、又た景仁の短長を採拾（採集）し、或いは異同を虚に造りて以て湛に告げる。是より主、相之勢いは分れる矣。

■ 〔義康の人事工作〕 義康は劉斌を以て丹陽尹と為さんと欲し、言の次（ついで）に、上に啟（続は啓）して其の家の貧しきを陳ず。言の未だ卒わらざるに、上は曰く、

「以て吳郡と為さん。」

後に會稽太守の羊玄保は還るを求め、義康は又た斌を以て之に代えんと欲し、上に啟して曰く、

「羊玄保は還るを欲（続は求）し、誰を以て會稽と為すかは審（つまびらか）ならず？」

上は時に未だ擬する所有らず、倉猝（慌ただしく）にして曰く、

「我は已に王鴻を用いる。」

去年の秋より、上は復た東府に往かず。

■ 〔劉湛は母の憂に遭い、失脚を恐れる〕 五月，癸巳（6 日），劉湛は母の憂（死）に遭いて職を去る。湛は自ら罪の釁（兆し）已に彰われ、復た全くするの地無しを知り、親しい所に謂って曰く、

「今年は必らず敗れん。常日正に口舌に頼りて之を争う、故に推遷するを得る耳。今既に窮毒（母子の別れをいう）し、復た此の望み無く、禍は至ること其の能く久しからん乎！」

● 乙巳（18 日），沮渠無諱は復た張掖を圍み、克たず、退きて臨松を保つ。魏主は復た討を加えず、但

だ詔を以て之を諭す。

● 「魏の元号は道教の太平真君」 **六月**，丁丑（21日），魏の皇孫の濬は生まれ，大赦す，改元して太平真君とし，寇謙之の《神書》（119 卷營陽王景平元年に見える）の云う「北方の太平真君を輔佐す」から取るが故也。（7-264p）

■ 太子の劭は京口に詣りて京陵を拜し，司徒の義康、竟陵王の誕等は並び従い，南兗州刺史、江夏王の義恭は江都より之に會す。

● **秋，七月**，己丑（3日），魏の永昌王の健は禿髮保周を番禾に撃破す。保周は走り，安南將軍の尉眷を遣わして之を追わしむ。

● 丙申（10日），魏の太后の竇氏は殂す。

■ 壬子（26日），皇后の袁氏は殂す。（太子劭の反逆はここに兆しす）

● 癸丑（27日），禿髮保周は窮迫して自殺す。

● 沮渠無諱は魏に降伏 **八月**，甲申（29日），沮渠無諱は其の中尉の梁偉をして魏の永昌王の健に詣ら使めて降を請い，酒泉郡及び虜とする所の將士の元絜等を歸す。魏主は尉眷をして留めて涼州に鎮せしむ。

■ **九月**，壬子（27日），元皇后を葬す。

【劉湛と劉斌の誅殺】

■ 「義康を江州刺史に出し、劉湛と劉斌らの誅殺」 上は司徒の彭城王の義康の嫌隙は已に著われ，將に禍亂と成らんとするを以て、**冬，十月**，戊午（3日），劉湛を収めて廷尉に付け，下詔して其の罪惡を暴き，獄に就けて之を誅し，並びて其の子の黯、亮、儼及び其の黨の劉斌、劉敬文、孔胤秀等八人を誅す。尚書庫部郎の何默子等五人を廣州に徙さしめ，因りて大赦す。是の日，義康に敕して入りて宿し，中書省に留め止めしむ。其の夕，分けて湛等を収める。青州刺史の杜驥は兵を殿内に勒して以て非常に備え，人を遣わして旨を宣べ義康に湛等の罪狀を以て告げる。義康は上表して位を遜れる，詔して義康を以て江州刺史と為し，侍中、大將軍は故の如く，出でて豫章に鎮せしむ。

■ 「上は何事も病臥中の殷景仁に相談」 初め，殷景仁は疾（前卷12年にあり）に臥して五年，上に見えずと雖も，而して密函（秘密の書簡）は去來すること，日に十を以て數え，朝政の大小は，必ず以て之を咨る。影跡は周密にして，其の際を窺う者有る莫し。湛之収める日，景仁は衣冠を拂拭せ使めて，左右は皆な其の意を曉らず。其の夜，上は華林園の延賢堂に出で，景仁を召す。景仁は猶ほ脚疾と稱し，小床（続は牀）輿を以て坐に就く。誅討の處分は，一に以て皆な之に委ねる。

■ 「沈慶之は戎服縛褲して入る」 初め，檀道濟は吳興の沈慶之を薦め，忠謹にして兵を曉り，上は隊を領して東掖門を防がしむ。劉湛は領軍たふ為り，嘗て之に謂って曰く、

「卿は省（領軍省）に在ること歳久しく，^{ちかごろ}比當に相い論ずべし（之が為に論叙すべし）。」

慶之は正色（顔色を変えて）して曰く、

「下官は省に在ること十年，自ら應に轉ずるを得るべし，復た此くを以て累を仰がず（転任するためにあなたのお世話にはならない）！」

湛之収めるの夕べ，上は開門して慶之を召し，慶之は戎服して褲はくを縛して而して入り，上は曰く、

「卿は何の意か乃ち爾しかして急に装うか？」

慶之は曰く、

「夜半隊主を喚ぶは、緩服す容からず。」(夜呼ぶからには、緊急時)

上は慶之を遣わして劉斌を収め、之を殺さしむ。

■[會稽公主は徐湛之を助命]驍騎將軍の徐湛之は、逵之(武帝の愛婿で、司馬楚之・魯宗の難に死す)之子也、(7-265p)義康と尤も親厚く、上は深く之を銜む。義康は敗れ、湛之は収え被れ、罪は死に當たる。其の母の會稽公主は、兄弟に於いては長嫡^{ちやく}為り、素より上の禮する所と為り、家事の大小は、必ず咨りて而して後に行う。高祖の微なる時、嘗て自ら新洲に於いて荻を伐り、衲布衫襖有り、臧皇后の手づから作る所也。既に貴となり、以て公主に付して曰く、

「後世驕奢にして節せざる有れば、此の衣を以て之に示す可し。」

是に至り、公主は宮に入りて上に見え、號哭し、復た臣妾之禮を施さず、錦囊を以て納衣を盛り地に擲^{なげう}ちて曰く、

「汝の家は本は貧賤にして、此くは是れ我が母が汝の父の為に作る所なり。今日は一飽の餐を得、遽^いかに我が兒を殺さんと欲す邪！」

上は乃ち之を赦す。

■[王球により履の助命]吏部尚書の王球は、履之叔父也、簡淡を以て美名有り、上の重しとする所と為る。履の性は進利(進むに務めて利を好む)、義康及び湛に深く結ぶ。球は屢々之を戒め、従わず。湛之誅するの夕、履は徒跣して球に告げ、球は左右に命じて為に履を取らしめ、先ず酒を温めて之に與え、謂つて曰く、

「常日汝に語ることは雲何？」

履は怖懼して答えるを得ず。球は徐^{おもむろ}に曰く、

「阿父(叔父き、位の意味)在り、汝は亦た何を憂うるか！」

上は球の故(南史に、帝宜都王の時、球と友となる)を以て、履は死を免るるを得、家に廢せらる。

■[江湛も連座せず]義康は方に事を用いるや、人は争いて親暱^{しんじつ}を求め、唯だ司徒主簿の江湛は早く能く自ら疏^{うとん}じ、出でて武陵内史と為るを求める。檀道濟は嘗て其の子の為に湛に婚を求め、湛は固く辭し、道濟は義康に因りて以て之を請い、湛は之を拒むに愈々堅く、故に二公之難に染まらず。上は聞いて而して之を嘉ぶ。湛は、夷(元嘉の始めに任用)之子也。

■[義康は書を読まず]彭城王の義康は省に十餘日停まり、上に見えて奉辭し、便ち渚に下る。上は唯だ之に對して慟哭するのみ、餘は言う所無し。上は沙門の慧琳を遣わして之を視さしむ、義康は曰く。

「弟子は還る理有るやあらず也？」

慧琳は曰く。

「恨むらくは公は數百卷の書を読まず！」

■[謝述もし存すれば]初め、吳興太守の謝述は、裕(115 卷義熙五年)之弟也。累に義康を佐^{たす}け(義康の江陵にて驍騎長史、郡軍太守、建康では司徒左)、數々規益する有り、早くに卒す。義康は將に南せんとし、歎じて曰く、

「昔謝述は唯だ吾に退くを勧め、劉班は唯だ吾に進むを勧む。今や班は存して而して述は死す、其の敗れる也宜^{むべ}なるか哉！」

上は亦た曰く、

「謝述若し存すれば、義康は必ず此に至らず！」

■[義康には手厚く、送り出す]征虜司馬の蕭斌を以て義康の咨議參軍と為し、豫章太守を領せしめ、事は大小と無く、皆な以て之に委ねる。斌は、羣^{むら}之(前卷十二年)之子也。龍驤將軍の蕭承之をして兵を將い

て防ぎ守ら使む。義康の左右の愛念する者は、並びて隨從するを聽す。資奉るに優厚に、信賜わるに相い系（続は係）ぎ、朝廷の大事は皆な之に報示す。

■ 〔會稽公主の働きで義康は身を全うす〕 之久しく、上は會稽公主に就きて宴集し、甚だ歡ぶ。主は起ち、再拜して叩頭し、悲しんで自ら勝たず。上は其の意を曉らず、自ら起ちて之を扶く。主は曰く、(7-266p)

「車子（義康の小字）は歳暮れ必ず陛下の容れる所と為らざらん、今は特に其の命を請う。」

因りて慟哭す。上も亦た流涕し、蔣山（高祖は蔣山の初寧陵に葬る）を指して曰く、

「必ず此の慮^{おもんばか}る無し。若し今の誓いに違えば、便ち是れ初寧陵に負くべし。」

即ち飲む所の酒を封じて義康に賜い、並びて書して曰く、

「會稽の姉は飲宴して弟を憶^{おも}（続は懷）い、餘す所の酒は今封じて送る。」

故に主之身を終わるまで、義康は恙^{つつが}無きを得る。

■ 臣光は曰く、帝之の義康に於けるや、友愛之情は、其の始め隆んならざるに非ざる也。兄弟之歡を失い、君臣之義を虧^かくに終わり、其の亂階を跡^{たず}（続は迹）ねるに、正に劉湛の權利之心は厭くこと有る無きに由る已。《詩》に云う、

「貪人^{たんじん}は類を敗るなり。」

其の是之謂いなる乎！

■ 〔義恭は彭城之敗に懲りる〕 南兗州刺史の江夏王の義恭を征して司徒、録尚書事と為す。戊寅（23日）、臨川王の義慶を以て南兗州刺史と為し、殷景仁を揚州刺史、僕射と為し、吏部尚書は故の如し。義恭は彭城之敗（義康の件）に懲り、總録を為すと雖も、文書を奉行して而して已み、上は乃ち之を安んず。上は年ごとに相府に錢二千萬を給し、它物は此れに稱^{かな}う。而して義恭は性は奢にして、用いて常に足らず、上は又た別に錢を給すること、年に千萬に至る。

●十一月，丁亥（3日），魏主は山北に如く。

■ 〔殷景仁没後の新政治体制〕 殷景仁は既に揚州に拜し、羸疾は遂に篤く、上は之が為に西州（揚州治所は建康臺城の西）に敕して道上に車聲有るを得ざらしむ。癸丑（29日）、卒す。十二月，癸亥（9日）、光祿大夫の王球を以て僕射と為す。戊辰（14日）、始興王の濬を以て揚州刺史と為す。時に濬は尚ほ幼なく、州事は悉く後軍長史の范曄、主簿の沈璞に委ねる。曄は、泰（高祖に賞愛される）之子。璞は、林子（高祖の將として功あり）之子也。曄は尋いで左衛將軍に遷され、吏部郎の沈演之を以て右衛將軍と為し、對して禁旅を掌らしむる。又た庾炳之を以て吏部郎と為し、俱に機密に參ぜしむ。演之は、勁之曾孫也。

■ 〔才能ある范曄を遷すやいなやの議論〕 曄は俊才有り、而れども薄情にして淺行し、數々名教を犯し、士流の鄙^{いや}しむ所と為る。性は躁競（心に落ち着きがなく、地位・財産を競いあう）、自ら才用盡きずと謂い、常に怏怏（心が満ち足りない）として志を得ず。吏部尚書の何尚之は帝に言つて曰く、

「范曄の志趣は異常なり、出でて廣州刺史と為すを請う。若し内に在りて鬲^{ふえつ}（兆し）成れば、鈇鉞^{しほしほ}（斧鉞）を加えざるを得ず。鈇鉞の亟々行ふは、國家之美に非らざる也。」

帝は曰く、

「始め劉湛を誅し、復た范曄を遷せば、人は將に卿等は才を容れる能わず、朕は讒言を信受すと謂わん。但だ共に、其の此くの如くを知れば、能く害と為す無からん也。」

●是の歳、魏の寧南將軍の王慧龍は卒し、呂玄伯は其の墓を留守し、終身去らず。（前卷八年にあり）

●魏主は伊馱を以て尚書と為し、郡公に封じんと欲し、馱は辭して曰く、

「尚書は務め殷に、公爵は至って重し、臣は年少くにして愚近なるは宜しく膺受する所に非ず。」

帝は其の欲する所を問い、(7-267p) 對えて曰く、

「中、秘(中書省・秘書省)の二省は諸々文士多く、若し恩矜して已まざれば、其の次に參するを請う。」

帝は之を善しとし、以て中護國將軍、秘書監と為す。

●大秦王の楊難當は復た武都王と稱す。

太祖文皇帝中之上元嘉十八年(辛巳、441年)

●春、正月、癸卯(20日)、魏は沮渠無諱を以て征西大將軍、涼州牧、酒泉王と為す。

■[扶令育の諫言、死を賜る] 彭城王の義康は豫章に至り、刺史(江州)を辭す。甲辰(21日)、義康を以て江、交、廣三州諸軍事を都督せしむ。前龍驤參軍の巴東の扶令育は闕に詣りて上表し、稱すらく、

「昔袁盎は漢の文帝を諫めて曰く、『淮南王が若し道路に霜露に遇いて死せば、陛下は弟を殺す之名有らん。』文帝は用いず、追悔しても及ぶ無し。彭城王の義康は、先朝之愛子なり、陛下之次弟なり、若し迷謬之愆ち有れば、正に之を數めるに善惡を以てし、之を導いて義方を以てす可し、奈何ぞ疑似之嫌を信じるや、一旦黜削すれば、遠く南垂に送らんや！草萊の黔首は、皆な陛下の為に之を痛める。廬陵の往事(120 卷元年)は、龜鑒と為すに足る。恐らくは義康は年窮まりて命盡き、南に奄忽せん、臣は微賤と雖も、竊に陛下の為に之を羞ず。陛下は徒だ惡枝之宜しく伐るべきを知り、豈に枝を伐る之樹を傷けるを知るや！伏して願わくは亟に義康を召して京甸に返し、兄弟は協和し、君臣は輯睦すれば、則ち四海之望みは塞ち、多言之路は絶えん矣。何ぞ必ずしも司徒公、揚州牧にして然る後に以て彭城王に置く可き哉！若し臣の言う所國に於いて非と為せば、請う重ねて誅すに伏して以て陛下に謝せんを。」

表奏し、即ち收めて建康の獄に付し、死を賜う。

■裴子野は論して曰く、

夫れ上に在りて善を為せば、雲行きて雨を施す若し、萬物は其の賜を受け其の惡に及ぶ也、若し天裂け地震うが若く、萬物の驚駭する所なり、其の誰か知ら弗らん、其の誰か見弗らん！豈に一人之身を戮し、一夫之口を鉗(首かせ)して、能く禳(御祓い)逃する所、能く弭(ゆはず、止める)滅する所哉？是れ皆な其の忿怒に勝たず而して疾疹の増す有る也。太祖之含弘(大きな包容力)を以てすら、尚ほ耳を彭城之戮で掩い、斯れより以後、誰か由りて言に易からん！有宋の累葉は、直諒(誠実で意志が固い)を聞くこと罕(稀)なり、豈に骨鯁(頑固者で怖い)之氣は、俗は前古に愧(慙愧)ずるか？抑々時に王の刑政は之を然ら使むる乎？張約は權臣に隕ち(120 卷元年にあり)、扶育は哲后に於いて斃れ、宋之鼎鑊(3 本足の鼎、煮殺す刑罰)、吁、畏る可き哉！

●[魏の新興王の俊の誅殺] 魏の新興王の俊は荒淫にして不法なり、三月、庚戌(28日)、爵を降して公と為す。俊の母は先に罪を得て死し、俊は怨望を積み、逆謀有り。事覺われ、死を賜う。辛亥(29日)、魏は郁久閭乞列歸(柔然の呉提・敕連可汗の兄で十六年捕虜となる)に爵を賜つて朔方王と為し、沮渠萬年を張掖王と為す。(7-268p)

●[河西の旧北涼の地は定まらず] 夏、四月、沮渠唐兒は沮渠無諱に反(続は叛)す。無諱は從弟の天周を留めて酒泉を守らしめ、弟の宜得と與に兵を引いて唐兒を撃ち、唐兒は敗死す。魏は無諱は終に邊患と為さんとすると以い、庚辰(28日)、鎮南將軍の奚眷を遣わして酒泉を撃たしむ。

■●秋，八月，辛亥（１日），魏は散騎侍郎の張偉を遣わして來聘す。

●九月，戊戌（１９日），魏の永昌王の健は卒す。

■冬，十一月，戊子（１０日），王球は卒す。己亥（２１日），丹陽尹の孟顗を以て尚書僕射と為す。

●〔酒泉の陥落、鄯善の防衛〕酒泉の城中の食は盡き，萬餘口は皆な餓死し，沮渠天周は妻を殺して以て戰士の食とす。庚子（２２日），魏の奚眷は酒泉を抜き，天周を獲え，平城に送り，之を殺す。沮渠無諱は食乏しく，且つ魏兵之盛んなるを畏れ，乃ち西に流沙を度らんを謀り，其の弟の安周を遣わして西に鄯善を撃たしむ。鄯善王は降らんと欲し，會々魏の使者は至り，勸めて拒みて守ら令む。安周は克つ能わず，退きて東城を保つ。

●〔氏王の楊難當は國を傾けて蜀を取らんとす〕氏王の楊難當は國を傾けて入寇し，蜀土に據らんと謀り，其の建忠將軍の苻衝（続は冲）を遣わして東洛に出てて以て梁州の兵を御（続は禦）がしむ。梁、秦二州刺史の劉真道は冲を討ち，之を斬る。真道は，懷敬（111 卷安帝隆安三年にあり）之子也。難當は攻めて葭萌を抜き，晉壽太守の申坦を獲り，遂に涪城を圍む。巴西、梓潼の二郡太守の劉道錫は城に嬰りて固守し，難當は之を攻めること十餘日，克たず，乃ち還る。道錫は，道產之弟也。十二月，癸亥（１５日），詔して龍驤將軍の裴方明（益州の良將、程道養の乱鎮圧など功多し）等は甲士三千人を帥いて，又た荊、雍二州の兵を發して以て難當を討ち，皆な劉真道の節度を受けしむ。

■晉寧太守の曩松子は反し，寧州刺史の徐循は討ちて之を平らぐ。

■天門の蠻の田向求等は反し，淪中（湖南省武陵道臨澧県、現・常德市臨澧県）を破る。荊州刺史の衡陽王の義季は行參軍の曹孫念を遣わして討ちて之を破る。

●魏の寇謙之は魏主に言つて曰く、

「今陛下は真君を以て世を御し，靜輪天宮之法を建て，開古以來，未だ之れ有らざる也。應に登りて符書を受け，以て聖徳を彰かにすべし。」

帝は之に従う。

令和２年２月１７日	翻訳開始	11966 文字
令和２年２月２１日	翻訳終了	19959 文字
令和２年１０月９日	完訳終了	23402 文字
令和３年８月８日	書下し終了	23317 文字